

国

語

(60分)

試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かず、
左記の注意事項をよく読むこと。

注 意 事 項

- 1、問題冊子は、20ページまであります。
- 2、解答用紙は問題冊子の中央にはさんでいます。解答はすべて、解答用紙に書き込みなさい。
- 3、始め、の合図でページ数を確認し、受験番号・名前を書きなさい。
- 4、問題の内容についての質問には、いっさい応じません。印刷のはっきりしないところがあれば、静かに手をあげなさい。
- 5、時間を知りたいときも、静かに手をあげなさい。
- 6、具合が悪くなったり、トイレに行きたいときは、手をあげて、監督の先生の指示に従って行動しなさい。
- 7、問題冊子は、各自持ち帰ってよろしい。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（なお字数制限のある問いは句読点や記号も一字に含みます）

見えない人が「見て」いる空間と、見える人が目でとらえている空間。それがどのように違うのかは、一緒に時間を過ごす中で、ふとした瞬間に明らかになるものです。

□ A、先ほども登場していただいた*木下路徳さんと一緒に歩いているとき。その日、私と木下さんは私の勤務先である東京工業大学大岡山キャンパスの私の研究室でインタビューを行うことになっていました。

私と木下さんはまず大岡山駅の改札で待ち合わせて、交差点をわたってすぐの大学正門を抜け、私の研究室がある西9号館に向かって歩きはじめました。その途中、一五メートルほどの緩やかな坂道を下っていたときです。木下さんが言いました。「大岡山はやっぱり山で、いまその斜面をおりているんですね」。

私はそれを聞いて、かなりびっくりしてしまいました。① □ B 木下さんが、そこを「山の斜面」だと言ったからです。

毎日のようにそこを歩き来していましたが、私にとってはそれはただの「坂道」ではありませんでした。

□ C 私にとってそれは、大岡山駅という「出発点」と、西9号館という「目的地」をつなぐ道順の一部でしかなく、曲がってしまえばもう忘れてしまうような、空間的にも意味的にも他の空間や道から*分節化された「部分」でしかなかった。それに対して木下さんが口にしたのは、もっと*俯瞰的で空間全体をとらえるイメージでした。

確かに言われてみれば、木下さんの言う通り、大岡山の南半分は駅の改札を「頂上」とするお椀をふせたような地形をしており、西9号館はその「ふもと」に位置しています。その頂上からふもとに向かう斜面を、私たちは下っていました。

□ D、見える人にとって、そのような俯瞰的で三次元的なイメージを持つことはきわめて難しいことです。坂道の両側には、サークル勧誘の立て看板が立ち並んでいます。学校だから、知った顔とすれ違うかもしれません。前方には混雑した学食の入り口が見えます。目に飛び込んでくるさまざまな情報が、見える人の意識を奪っていくのです。

□ E それ

らをすべてシャットアウトしてスマホの画面に視線を落とすか。そこを通る通行人には、自分がどんな地形のどのあたりを歩いているかなんて、想像する余裕はありません。

そう、私たちはまさに「通行人」なのだとそのとき思いました。「通るべき場所」として定められ、方向性を持つ「道」に、いわばベルトコンベアのように運ばれている存在。それに比べて、まるでスキーヤーのように広い平面上に自分線を引き木下さんのイメージは、より開放的なものに思えます。

物理的には同じ場所に立っていたのだとしても、その場所に与える意味次第では全く異なる経験をしていることになる。それが、木下さんの一言が私に与えた驚きでした。人は、物理的な空間を歩きながら、実は脳内に作り上げたイメージの中を歩いている。私と木下さんは、同じ坂を並んで下りながら、実は全く違う世界を歩いていたわけです。

彼らは「道」から自由だと言えるのかもしれませんが。道は、人が進むべき方向を示します。もちろん視覚障害者だって、個人差はあるとしても、音の反響や*白杖の感触を利用して道の幅や向きを把握しています。しかし、目が道のずっと先まで一瞬にして見通すことができるのに対し、音や感触で把握できる範囲は限定されている。道から自由であるとは、予測が立ちにくいという意味では特殊な慎重さを要しますが、だからこそ、道だけを特別視しない俯瞰的な*ビジョンを持つことができたのでしょうか。

全盲の木下さんがそのとき手にしていた「情報」は、私に比べればきわめて少ないものでした。少ないどころか、たぶん二つの情報しかなかったはずです。つまり「大岡山という地名」と「足で感じる傾き」の二つです。しかし情報が少ないからこそ、それを解釈することによって、見える人では持ち得ないような空間が、頭の中に作り出されました。

木下さんはそのことについてこう語っています。「たぶん脳の中にはスペースがありますよね。見える人だと、そこがスーパ―や通る人だとかで埋まっているんだけど、ぼくらの場合はそこが空いていて、見える人のようにには使っていない。

でもそのスペースを何とか使おうとして、情報と情報を結びつけていくので、そういったイメージができてくるんでしょうね。さつきなら、足で感じる『斜面を下っている』という情報しかないのです、これはどういうことだ？と考えていくわけです。だから、見えない人はある意味で余裕があるのかもしれないね。見えると、坂だ、ということまで気が奪われちゃうんでしょね。きつと、まわりの風景、空が青いだとか、スカイツリーが見えるとか、そういうので忙しいわけだね」。

まさに情報の少なさが特有の意味を生み出している実例です。都市で生活していると、目にとらえる情報の多くは、人工的なものです。大型スクリーンに映し出されるアイドルの顔、新商品を宣伝する看板、電車の中吊り広告……。見られるために設えられたものの、本当は自分にはあまり関係のない「意味」を持たないかもしれない、純粹な「情報」もたくさんあふれています。視覚的な注意をさらっていくめまぐるしい情報の X。確かに見える人の頭の中には、木下さんの言う「脳の中のスペース」がほとんどありません。

それに比べて見えない人は、こうした X とは無縁です。もちろん音や匂いも都市には氾濫していますが、それでも木下さんに言わせれば「脳の中に余裕がある」。さきほど、見えない人は道から自由なのではないか、と述べました。この「道」は、物理的な道、つまりコンクリートや土を固めて作られた文字通りの道であると同時に、比喩的な道でもあります。つまり、「こつちにおいで」と人の進むべき方向を示すもの、という意味です。

人は自分の行動を一〇〇パーセント自発的に、自分の意志で行っているわけではありません。知らず知らずのうちにまわりの環境に影響されながら行動していることが案外多いものです。

「寄りかかって休む」という行為ひとつとっても、たいていは寄りかかろうと思って壁を探すのではなくて、そこに壁があるから寄りかかってしまう。⑤ 子どもの場合は特にその割合が高くなります。「いたずら」とはたいていそうしたもので

す。ボタンがあるから押し^おしたくなるし、台があるからよじ登^{のぼ}ってしま^う。環境に埋^おめ込まれたさまざまなスイッチが*トリガーにな^って、子どもたちの行動が誘^{ゆう}発^{はつ}されていきます。

いわば、人は多かれ少なかれ環境に振^ふり付けられながら行動している、と言えるのではないでしようか。

あるトリガーから別のトリガーへとめまぐるしく注意を奪^{うば}われながら、人は環境の中を動かされていきます。人の進むべき方向を示す「道」とは、「こっちに来なさい、こっちに来^こてこうしなさい」と、行為を次々と導^{みち}いていく環境の中に引かれた導線^{みち}です。

たとえば京都の*桂離宮^{かつらりきゆう}に行くと、その場所どこを見るべきかというまなざしの行方までもが計算されていることに気づきます。人の行動をいざなう「道」が随所^{ずいしょ}に仕掛^{しか}けられているわけです。実際に訪^まれてみて、桂離宮というのはまるで*舞踏譜^{ぶとうふ}のようだとしきりに感心^{かんしん}しました。

⑥桂離宮ではひとつの道が明瞭^{めいりょう}に引かれています^が、都市においては無数の道が縦横無^む尽^{じん}に引かれています。しかもその多くは、人の欲望に強^うく訴^うえてくる。真夏のかんかん照りの道にコーラの看板があれば飲みたくな^ってしま^うし、「本日三割引き」ののぼりを見ればついスーパーに入^いって余計な買^かい物をしてしま^う。その欲望がもと私の中にあ^あったかどうかは問題ではありません。視覚的な刺激^{しげき}によ^よって人の中に欲望がつくられていき、気がつけば「そのような欲望を抱^かえた人」にな^なっています。

資本主義システムが過剰^{かじょう}な視覚刺激を原動力にして回^{まわ}っていることは言うまでもないでしよう。それを否定するのは簡単ではないしするつもりはありません^が、都市において、私たちがこの振り付け装置に踊^{おど}らされがちなのは事実です。最近ではむしろ、パソコンのデスクトップやスマートフォン^{おと}の画面上に、こうしたトリガーは増殖^{ぞうし}しているかもしれない。仕事をするつもりでパソコンを開いたら買^かい物をしていた……よくあることです。私たちは日々、軽い記憶喪失^{きおくそうしつ}に見舞^まわれています。いったい、私が情報を使^{つか}っているのか、情報が私を使^{つか}っているのか分かりません。

こんなふうには、都市というものを、ひとつの巨大な振り付け装置として見てみる。そうすると、見える人と見えない人の「ダンス」の違いが見えてきます。中途失明の難波創太^{なんばそうた}さんは、視力を失ったことで、「道」から、都市空間による「振り付け」から解放された経験について語っています。

「見えない世界というのは情報量がすごく少ないんです。コンビニに入っても、見えところはいろいろな美味^{おい}いそうなものが目に止まったり、キャンペーンの情報が入ってきた。でも見えないと、欲しいものを最初に決めて、それが欲しいと店員さんに言って、買って帰るといふふうになるわけですね」。

周知の通りコンビニの店内は、商品を配列する順番から高さまで、売り上げを最大化するための「振り付け」がもっとも周到に計算された空間のひとつです。うかうかしていると公共料金を払いに來たのについてプリンを買ってしまったりする。

ところが難波さんは、見えなくなったことで、そうした目に飛び込んでくるものに惑^{まど}わされなくなった。つまりコンビニに踊らされなくなったわけです。あらかじめ買うものを決めて、その目的を遂行^{すいこう}するような買い方になります。目的に直行するというのがむしろ人間のようですが、むしろ逆でしょう。むしろ個人差はあるでしょうが、見える人の手足が目目の刺激に反応してつい踊り出してしまうのに対して、見えない人はもっとゆったり、俯瞰的にものごとをとらえているのかもしれない。

(伊藤亜紗^{いとうあさ}『目の見えない人は世界をどう見ているのか』より)

(注)

* 木下路徳さん……筆者と交流のある視覚障害者。

* 分節化……全体をいくつかの部分に分けること。

*俯瞰的……高い所から広く見下ろすこと。

*白杖……目の不自由な人が歩行時に使う白いつえ。

*ビジョン……展望。見通し。

*トリガー……銃じゅうの引き金。転じて物事のきっかけ。

*桂離宮……十七世紀に建てられた、皇族の別邸べつてい。

*舞踏譜……踊りの振付けを紙面に記したもの。

問1 空欄部

A

E

 にあてはまる語句として適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア つまり イ あるいは ウ たとえば エ けれども オ なぜなら

問2 傍線部①「かなりびっくりしてしまいました」とありますが、その理由として最も適切なものを次の中から選び、

記号で答えなさい。

ア 自分にとっては一五メートルほどの緩やかな坂道としか感じられなかったのに、木下さんは山の斜面のように長く急な坂道だと感じていたから。

イ 自分にとっては毎日行き来している町中の坂道に過ぎなかったのに、木下さんは山の斜面という豊かな自然の中の道だと思っていたから。

ウ 自分にとってはとりたてて特徴のないありふれた坂道でしかなかったのに、木下さんは山の斜面という他の空間や道から区別した言い方をしたから。

エ 自分にとっては出発点と目的地の間にあるただの坂道に過ぎなかったのに、木下さんは山の斜面という全体像を意識したとらえ方をしたから。

オ 自分にとっては曲がってしまえば忘れてしまう坂道でしかなかったのに、木下さんは山の斜面のように味わい深いものだと言ったから。

問3 傍線部②「見える人にとって、そのような俯瞰的で三次元的なイメージを持つことはきわめて難しいことです」と

ありますが、その理由を五十字以内で説明しなさい。

問4 傍線部③「物理的な空間を歩きながら、実は脳内に作り上げたイメージの中を歩いている」とはどういうことか、その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 知覚される空間は、それがどういうものかという各自の解釈をもとにして理解されているということ。
- イ 知覚される空間は、見えない部分やよくわからない部分を想像で補って理解されているということ。
- ウ 知覚される空間は、現実にとらわれない自由気ままな空想をもとにして理解されているということ。
- エ 知覚される空間は、日々生じるさまざまな違いをあえて意識しないことで理解されているということ。
- オ 知覚される空間は、事前に得た情報によって作られた先入観にもとづいて理解されているということ。

問5 傍線部④「ある意味で余裕がある」とはどういうことか、その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 目に見える情報についてあれこれ考える必要がなく、それ以外の情報を多く取り込むことができるということ。
- イ 目がとらえる人工的な情報にまどわされなくて、人間の本能的な部分で情報に向き合うことができるということ。
- ウ 外部からの視覚的な大量の情報にわずらわされず、限られた情報を結びつけて判断することができるということ。
- エ 見られるために用意された情報が入らないため、情報処理が不要となって脳を休ませることができるということ。
- オ 視覚に訴える情報は自分に無関係なものが多く、そんな情報が入っても気にせずにいることができるということ。

問6 空欄部 X に共通してあてはまる語として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 津波 つなみ イ 大群 ウ 洪水 こうずい エ 台風 オ 暴風

問7 傍線部⑤「子どもの場合は特にその割合が高くなります」とありますが、その例として適切でないものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア チョウが飛んできたので、つかまえようとした。
 イ おどっている人を見て、自分もおどりだした。
 ウ 雪が降り出したので、空に向かって手をかざした。
 エ テレビがついていると、いつまでも見ている。
 オ おなががすいたので、おやつを食べてしまった。

問8 傍線部⑥「桂離宮ではひとつの道が明瞭に引かれていますが、都市においては無数の道が縦横無尽に引かれています」とはどういうことか、その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 桂離宮は見えて回る順路がはつきりと決められているが、都市は生活に便利のように多くの道路がさまざまに張り巡らされているということ。

イ 桂離宮は人が決まった行動をとるように情報が計算されているが、都市は人のさまざまな行動をうながす情報が入り乱れているということ。

ウ 桂離宮は一つの考え方にもとづいて全体が造られているが、都市はさまざまな考え方にもとづいた建築物が寄せ集められているということ。

エ 桂離宮は人の行動をうながす仕掛けがほとんどないが、都市は人の行動をうながす仕掛けがあちこちらにあふれかえっているということ。

オ 桂離宮はまなざしの行方を誘導するように建築されているが、都市はあちこちらに視線がただようことを前提に造られているということ。

問9 傍線部⑦「この振り付け装置に踊らされがち」とはどういうことか、七〇字以内で説明しなさい。

二 次の文章は、魚釣りを趣味とする甥から、釣り上げた鯛をもらった「私」（歌子）の話である。これを読んで、後の問いに答えなさい。（なお字数制限のある問いは句読点や記号も一字に含みます）

「おばあさん」と言われても反論できない年齢と外見になってみて、つくづく思う。どうも世の中には、老齢の女性料理上手にちがいない、そうであってしかるべき、なぜなら長年にわたって家事をしてきたはずなのだから、という期待があるのではないか。「おばあ知恵袋」のような言いまわしが、老齢女性全般への期待をますます高めている。おじいには知恵袋は備わっていないのかと言いたし、私を「丸山さんのおばあさん」と呼ぶ隣家の小学生女子にも、「私は孫がないのでおばあさんではありません」と言いたい。もちろん言えないので、鯛の調理法を懸命に考える。

その結果、鯛めしを作ろうと思いついた。鯛めしならば炊飯器がなんとかしてくれるし、余ったぶんをラップで包んで冷凍保存できる。骨を取るのが面倒だが、仕事を引退してから時間ならばいくらでもあるのだ。寿命までの余裕はそうないかもしれないのに、鯛の骨を取ることに時間を費やそうと考えるのが我ながら不思議だけれど。

でも、自分に与えられた時間がどれほどだろうと、やはり私は下手なりに料理をしたり、部屋をちよこちよこ掃除したり、買い物ついでにちよつと遠まわりして散歩したりで日々を過ごすはずだ。ほかにすべきことなどない気がする。働くことを通して、もう充分にひととまじわってきた。そしてわかったのは、家族がいようとまいと、金があるうとなかろうと、だれしもそれぞれ固有の苦しみや喜びがあり、しかし生きているかぎりご飯を食べて寝て起きて生活はつづくのだという、あたりまえのことだった。私はもう、さして親しく交流したいひととなし、できるだけ静かに穏やかに毎日を暮らしたい。心にさざなみが立つのは、小学生の女の子に「おばあさん」とにこにこ呼びかけられるときぐらいにしておきたい。

鯛めしは*穏当だ。手間がかからないうえに、料理をした、きちんと生活している、という充足感を得られる。しかも、

当面は冷凍した鯛めしでしのげるので、料理を少々サボることまでできる。私はさっそく昆布をハサミで切って、浅く水を張った鍋なべに入れた。米を研ぐあいだでは出汁だしは出ないだろうけれど、ついやってしまうおまじないのようなものだ。米は二合か三合か迷ったすえに三合にした。どれだけ食べるつもりなのかと一人で笑ってしまった。

炊飯器の内釜うちがまに米と醤油しょうゆと酒とみりんを入れ、昆布ごと水を注ぐ。以前に店で食べた鯛めしに生姜しょうがは入っていなかった気もするが、親指の頭ほどの生姜の欠片かけらを細かく刻み、それも入れる。魚は生臭いなまぐさ、という身に染みついた観念を鎮めるための、これまたおまじないのようなものだ。

米に水分を吸わせるあいだに、フライパンに薄くゴマ油を引き、鯛を焼く。頭と尻尾しっぽがはみでてしまい、こんなことからブツ切りにでもなんでもして、グリルで焼き魚にしてもよかったのではと思うも、まあ焦げ目がついて香ばしさが出れば鯛めしはの鯛としては合格だろうと、フライ返しを使って鯛をずらしたりひっくり返したりする。薄い皮がフライパンに貼りついて苦心した。どうせ炊きあがったら身をほぐして骨を取るのだから、多少崩れてもかまうまい。〈中略〉

焦げ目がつきすぎてしまったきらいはあるが、鯛を内釜に移す。頭と尻尾が収まりきらないので、身を湾曲わんきよくさせて無理やり入れる。こんなことならブツ切りにでもして焼き魚に、とまた思う。内釜を炊飯器にセットし、あとは炊けるのを待つだけだ。

私が魚に少々身がまえてしまうのには、子どものころの釣りが影響しているだろう。まだ小学校にも上がらないころ、家から歩いて一分の川に父と妹と行った。故郷の村は山がちで、遊び場といえば田んぼのあぜ道か清流だけだったが、就学まえの子どものみで川遊びをするのは禁じられていたため、その日は妹も私もおおはしゃぎだった。父は村の郵便局に勤めていて、休日はごろごろと昼寝したり寄り合いに出たりで、川につれていってくれるのはめずらしかった。

川に入るには水温が低い、たしか五月ぐらいのことだった。父は幼い子どもを飽きさせぬよう、ぬかりなく釣り竿さおを持参しており、釣り竿といってもそれは細い竹に糸をくくりつけたただけのお手製だった。妹と私、それぞれの背丈せたけに合わせ

た釣り竿を手渡した父は、*ピースの空き缶を橋のたもとの地面に置いた。なかには、庭を掘り返してつかまえたミミズが **X** 入っていた。

父はミミズをひきちぎり、自分の釣り鉤に刺した。それでもまだ動くミミズの体に私はひるんだが、妹はむんずと缶のなかのミミズをつかみ、父を真似ようとする。けれど、子どもの力ではミミズをうまくひきちぎれない。結局、父が妹と私の釣り鉤にミミズをつけた。妹は不満そうだったが、私は心底からホッとした。

私たち三人は並んで橋に立ち、川面に糸を垂らした。糸を引っばられたら竿を上げろ、と父は言ったが、水の流れはとくに魚に擬態して、**Y**と糸を引っばる。てっきり食いついたとばかり思ってた私は竿を上げるのだが、鉤についたミミズに変化はない。歌子はせっかちなと笑う父の隣で、妹は眼光鋭く川面をにらんでいた。

思えば、甥の釣り好きは妹譲りなのかもしれない。

妹は短い釣り竿を自在に操り、三十分ほどで五匹も魚を釣りあげた。父は三匹、私は一匹で、いずれも大人の中指ほどの細長い魚だ。なんという名の魚だったのか、たいがい村のひとは、川に棲むフナ、鮎、メダカ、ウナギ以外は、すべておおざっぱに「魚」としか呼ばなかった。父も **B** 多分に漏れず、*ようけ魚が釣れたのう、と言った。特に舞子は漁師になれるで、と褒められて妹はうれしそうだった。

その経験があつて、海沿いの〇市に住む男性との結婚を決めたのかもしれない、などとばかなことを考えつつ、*卓袱台に向かつて緑茶を飲む。炊飯器が不穩に振動しはじめた。そろそろ買い替えどきだろうか。けれど炊飯器よりさきに私の寿命が来るかもしれず、こうしてなにかしようかと思うつど、どちらが長生きするかを考慮しなければいけないのが厄介だ。

父は、糸のついた竿とミミズは橋から川に放りこみ、鉤は再利用のためピース缶に収めた。子どものまえて不法投棄する父親など、いまはいないだろう。そういえば父は釣りのあいだも*新生をふかし、吸い殻はむろん地面にポイ捨てして

いた。ピース缶はだれかにもらってちまちまと吸った名残で、ふだんは新生だった。たまに、父の吸っていた甘苦いような新生の香りが、記憶の底から鼻さきをかすめることがある。

九匹の小魚が入ったバケツは父がぶらさげ、妹と私はそのあとについて、家に戻った。母と祖父母が釣果を喜び、夕飯のおかずにするため、母と祖母はさっそく台所に立って、小魚に天ぶらの衣をつけた。

私は衝撃を受けた。釣った魚を食べるとは思っていなかったのだ。包丁の腹で頭を叩かれ、気絶だか絶命だかした魚は、おとなしく衣をまぶされ、熱した油に投じられてあつというまに天ぶらになった。祖父母と父に二尾ずつ、母と妹と私が一尾ずつ。小皿に載って*座卓へと登場した魚をまえに、食べたくない私はべそをかいだ。

「ふだんも魚の天ぶらを食べとるやろ。あれと同じや」

「*おいしいよって食べなさい。はよせんと冷めるで」

両親が口々に言い、

「あれあれ、歌ちゃん魚を飼うつもりやったんかな。かわいそうなことしたな」

と、私をかわいがっていた祖母が慰めてくれた。そのあいだに妹は天ぶらを頭からばりばりたいらげており、私はいつそう悲しくなった。最終的には祖父の、

「釣った魚を、食いもせんで*ほかしたらバチが当たる。かわいそうでもありがたく食うのが、せめてもの供養ちゅうもんや」

という一言で、私は目をつぶって天ぶらを食べた。清流で育った小さな魚は、驚くほどおいしかった。細長いのに身はふくふくとして、ほんのりと甘かった。おじいちゃんたちはもう一匹食べられていいなと、あのとき私はたしかに思い、^⑨そんなふうに思う自分がうしろめたく、なんだかおかしくもあった。

いまなら、「現金な」という形容がふさわしいとわかる。泣き笑いして食べた小魚ほどおいしい天ぶらには、その後もつ

いぞ出会わず、私はなんとなく魚をまえにすると腰が引けるといふか身が引き締まる気持ちになる。

(三浦しをん「魚の記憶」『25の短編小説』より。問題作成の都合上、本文を改めた部分がある。)

(注)

- * 穏当……おだやかで無理がないこと。
- * ピース……たばこの商品名。やや上等なもので、五十本入りの缶がある。
- * ようけ……たくさん。
- * 卓袱台……脚を折りたためる、円形の低い食卓。
- * 新生……たばこの商品名。大衆向けで人気だった。
- * 座卓……畳に座って使う低い机。
- * おいしいよって……おいしいから。
- * ほかしたら……捨てたら。

問1 傍線部①「期待があるのではないか」とありますが、「私」はその期待をどのように感じているか、その説明として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ありがたい イ 納得できない ウ 仕方がない エ どうでもいい オ さびしい

問2 傍線部②「我ながら不思議だけれど」とありますが、そのように思う理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 鯛の骨を取ることぐらいにしか時間の使い道がないのは、とてもふつうの生活とは思われないから。
イ 寿命までの余裕がないかもしれないと考えたが、そんなことは誰にもわかるはずがないことだから。
ウ そう遠くないうちに亡くなってしまふのならば、長い時間をかけて鯛の骨を取る必要などないから。
エ 自分で鯛めしを作ろうと決めておきながら、骨を取るのを面倒くさがるのはおかしいと感じたから。
オ 寿命があまり残っていないのであれば、特別なことをするために時間を使うべきだと思われるから。

問3 傍線部③「ほかにすべきことなどない気がする」と「私」が考える理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 料理をしたり掃除をしたり散歩をしたりしていれば、自分は誰よりも幸せだと実感することができるから。
イ 働くことを通して人と交流してきたので、今さら新しい人間関係を築くことがわずらわしく感じられるから。
ウ 家族がいるとか金があるとかいうことに関係なく、自分にふりかかる運命は変えようのないものであるから。
エ 人はそれぞれになやみや喜びを抱えているが、どんな時でも食べて寝ることは欠かせない大切な営みだから。
オ 自分には交流したい人もなく穏やかに暮らしたので、したくないことまでする必要はないと思えるから。

問4 傍線部④⑤「おまじないのようなもの」とはどういうものか、その説明として最も適切なものを次の中から選び、

記号で答えなさい。

- ア 実際に意味はなくても、そうすることで安心できるもの。
- イ 真偽はさだかでないが、誰もが同じようにしているもの。
- ウ 科学的な根拠はないが、昔から言い伝えられてきたもの。
- エ 世間では認められなくても、自分だけは信じているもの。
- オ めったに効果が表れないが、ごくたまには役に立つもの。

問5 傍線部⑥「その日は妹も私もおおはしゃぎだった」とありますが、その理由として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア してはいけない遊びをこっそりできることに興奮するから。
- イ 普段できない遊びを父がさせてくれることがうれしいから。
- ウ 数少ない遊び場とは違う場所で遊べることが楽しみだから。
- エ なまけものの父がはつらつとしていたことに安心したから。
- オ 父が以前からの約束をはたしてくれることが喜ばしいから。

問6 二重傍線部A「ぬかりなく」B「ご多分に漏れず」の本文中での意味として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

A 「ぬかりなく」

ア 計画を知らせず

イ 数をたがえず

ウ 約束を忘れず

エ 手間をおしماず

オ 用意をおこたらず

B 「ご多分に漏れず」

ア 例外ではなく

イ いつもどおりに

ウ 満足そうに

エ ためらわずに

オ 気がねなく

問7

空欄部

X

Y

にあてはまる語句として適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ようよう

イ くいくい

ウ すいすい

エ うねうね

オ ねちねち

問8 傍線部⑦「妹は不満そうだったが、私は心底からホッとした」について、次の(1)(2)に答えなさい。

(1) ここから読み取れる「妹」と「私」の性格として適切なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 明るい イ 冷静だ ウ ものおじしない エ 冷たい オ 気が小さい

(2) 同じく「妹」と「私」を対比的に表現した一文をこれ以降の本文からさがし、最初と最後の三字ずつを抜き出して答えなさい。

問9 傍線部⑧「眼光鋭く川面をにらんでいた」とは妹のどのような様子を表しているか、二十五字以内で説明しなさい。

問10 傍線部⑨「そんなふうに思う自分がうしろめたく、なんだかおかしくもあった」とはどういうことか、八十字以内で説明しなさい。

三

次の傍線部のカタカナを漢字で書きなさい。

- ① 工事の期間をノばす。
- ② スジガき通り物事が進む。
- ③ 倒産はヒッシの状況だ。
- ④ ドウソウ会に出席する。
- ⑤ ヒデンの調理法を受けつぐ。
- ⑥ 環境問題についてトウロンする。
- ⑦ カブシキの仕組みを理解する。
- ⑧ どんなことにもマジメに取り組む。
- ⑨ 昔のエマキ物に感動する。
- ⑩ キリツ正しい生活を送る。



2023A1

↓ここにシールを貼ってください↓

国語 解答用紙

受験 番号						
名前						

問 1 二

問 9 問 7 問 4

問 3 問 2 問 1 一

問 2

問 3

問 8

問 5

問 6

A

B

C

D

E

三

問 10

問 9

問 8

問 7

問 4

⑨

⑦

④

①

⑩

⑧

⑤

②

⑥

③

(1) 妹

私

(2)

}

X

Y

問 5

問 6

A

B

